

# いじめ傍観者の体験プロセスと傍観行動の維持構造

－大学生・大学院生への回顧的インタビューから－

The experiencing process of bullying bystanders and the maintenance structure of their behavior

－Retrospective interview research of university students－

片山皓絵

Hiroe KATAYAMA

東京大学大学院 教育学研究科

Graduate School of Education, The University of Tokyo

Key words: bullying, bystander, qualitative study

## 問題と目的

いじめ加害者の行動には、周囲の生徒、すなわち傍観者が果たす役割が大きいことが明らかになっている(森田, 1985)。量的調査を用いて、傍観行動に影響を与える要因を検討する研究は蓄積されてきており、自分の置かれている状況や加害者・被害者との関係などが要因となりうると言われている(蔵永ら, 2008; 大坪, 1999)。しかし、質的調査を用いて、傍観行動が生起するプロセスとその要因を詳細に検討した研究は少ない。したがって、本研究では傍観者の体験プロセスに着目し、傍観行動の維持構造について明らかにすることを目的とする。

## 方法

中学生時に加害行為を見たことのある大学生・大学院生8名(平均年齢21.8歳、標準偏差1.4歳)に対し、半構造化面接によるインタビュー調査を行った。調査時期は2014年7月～9月で、調査時間は60分程度、調査内容は加害行為の開始から終結までに生じた事象とそれに伴う感情であった。分析はグラウンデッド・セオリー・アプローチ(Strauss & Corbin, 1998)を援用した。

## 結果 ①体験プロセス

(以下、得られたカテゴリーグループを【 】, カテゴリーを《 》, サブカテゴリーを< >で示す)

傍観者の体験プロセスは、加害行為の前段階、加害行為の最中の段階、加害行為の後段階の3段階に分けられた。まず、前段階では、【遊び・喧嘩の延長】【誰でも良かった】という理由によって加害行為が生じ、それを目撃することで傍観行動が生じていた。また、傍観者間で被害者が【加害の対象であるという認識が定着する】ことで、加害行為とほぼ同時期に傍観行動が生起することもあった。次に、最中の段階では、《加害行為が行われる》《被害者の言動により悪化する》など、自分の意図とは外れたところでの加害者・被害者の動きを示す【自分の“外”で生じたこと】が起きる。これに対し、《傍観行動をする》《傍観行動が促進される》など、自分の意図による動きを示す【自分の“中”で生じたこと】が起きる。その後、【本質的には解決しないまま】の状態が続き、【物

理的要因】によって完全な終結を迎えることとなる。また、加害行為や傍観行動が続いている最中に限り、加害者・被害者・傍観者間で【人間関係の一時的な変化】も生じていた。最後に、後段階では、【加害行為から影響を受ける】一方で、「止めたけれど止められない」というような【複雑な気持ち】が生じており、【当時の経験が抑止につながらない】状態があることがわかった。

## 結果 ②傍観行動の維持構造

傍観行動の維持構造を検討した結果、加害行為を促進するような【校内の雰囲気】が生じていたことがわかった。また、スクールカーストが顕著に見られ、<ステータスが重視される>一方で、カースト上位も含め<誰でも被害者になりうる>という【人間関係の特徴】も見られた。このような状況要因のもとでは、《いじめへの認識が不十分》や《自分の利益を優先する》という【傍観者の心理】が生まれていた。また、傍観者が《自分の利益を優先する》ことで、自分に都合の良いように加害者・被害者との【関係性の維持】を行っていた。

## 考察

傍観者の体験プロセスと傍観行動の維持構造には、以下のような関連があると考えられる。加害行為の最中の段階で、<被害者が助けを求めない><被害者に共感できない>などの要因によって《傍観行動が促進される》ことで、傍観者は自身の行動を正当化していた。そのような正当化によって、《いじめへの認識が不十分》という【傍観者の心理】が強化されていた。このように、《傍観行動が促進される》ことと【傍観者の心理】が相互に影響し合い、悪循環が生じていたと考えられる。

## 主要参考文献

- 蔵永瞳・片山香・樋口匡貴・深田博己(2008). いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響 広島大学心理学研究, 8, 41-51.  
森田洋司(1985). 学級集団における「いじめ」の構造 ジュリスト, 836, 29-35.  
大坪治彦(1999). いじめ傍観者の援助抑制要因の検討 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 50, 245-256.